

令和7年度 学校総合評価

6 今年度の重点課題に対する総合評価

「学習活動」「学校生活」「進路支援」「特別活動」の4領域で重点項目・課題を設定して教育活動に取り組んだ。4領域とも昨年度の反省・課題を踏まえるとともに、生徒の主体性や積極性のさらなる向上を目指しながら、授業や部活動、各種行事を行った。各重点課題の評価等の概要は以下のとおりである。

(1) 学習活動

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、多くの教員がICTを効果的に活用し、授業を工夫し、実践した。また、互見授業を積極的に行い、教科部会を中心に授業の成果や課題を共有し、授業改善に努めた。生徒の家庭でのICTの利用状況については、週3回以上利用している生徒の割合は6割程度であった。教育用クラウドサービスは連絡機能としての役割は充分果たしている。生徒が授業内容の理解を深めるためのツールとしてのタブレットの利活用について、継続して研究・実践に繰り返し取り組んでいく必要がある。商業科では、目標値を下回ったものの多くの生徒が自らの目標を持ち、主体的・意欲的に検定取得に取り組んでおり、学ぶ意欲や進路目標の達成にもつながっている。授業では、個々の生徒の理解度の相違にも対応できるよう、常に効果的な指導を模索し改善を行っている。

(2) 学校生活

スマートフォンの普及に伴い、使用ルールやマナーを守らない生徒や依存症の生徒も見受けられる。スマートフォンの長時間使用を控え、ネット依存にならない方策を生徒自治委員会が中心となって行った。生徒が主体的にルールを守れるよう「ネットルール四箇条啓発ポスター」を作成、掲示して、ルールの遵守について意識の高揚を図っている。

生活習慣を整え、心身の健康について主体的に判断する態度の育成を図るため、生徒が制作した「保健だより」等の情報紙の発行やホワイトボードへの掲示を行った。生徒保健委員会では「朝食の大切さ」について調査・研究を行い、発表をとおして学校医から助言を得ることができた。

(3) 進路支援

1・2年生に対しては、自らの進路目標を実現するため、進路支援プログラムの事前・事後学習を充実させ、進路実現のために基礎学力の大切さを認識させるとともに、オープンキャンパスや学校見学会、大学等の出張講座、校外での研修会などへの積極的な参加を促した。特に、2年生が熱心にオープンキャンパスや職場見学会等に参加している。3年生に対しては、教員が積極的に進路の情報収集と情報共有を行い、学習指導や進路指導、数多くの面談を含めた個別指導に取り組んだ結果、進路選択の満足度について全体として目標を達成できた。

(4) 特別活動

学校行事や特別活動に全校生徒が意欲的に取り組み、集団活動や体験活動を通して、豊かな学校生活を築きながら連帯意識を育むことができた。体育大会では、生徒会が中心となり種目や実施方法を工夫したことで、学年を越えて様々な場面で生徒の自主的な活動を見ることができた。文化部発表会では、実施方法を工夫するなどし、合唱コンクールも開催した。部活動では、男子ホッケー部が全国高校総体、全国選抜大会ともベスト8、女子ホッケー部が全国選抜大会3位、新聞部が全国高総文祭に10年連続で出場し、全国高校新聞年間紙面審査賞優秀賞を受賞するなど、多くの部が成果をあげた。また、各部が実態に応じた目標を設定し、運動部、文化部ともに効率的な活動を実践することができた。

7 次年度へ向けての課題と方策

- (1) 生徒の学びを補償するため、タブレット等のICT機器や教育用クラウドサービスを利用して、「主体的・対話的で深い学び」を推進する授業づくりをさらに進めていく。生徒のタブレットの効果的な活用について一層工夫するとともに、ITリテラシーを高める学習指導をする。商業科については、今後も粘り強く指導を行い、論理的な思考能力を育成し、上級の資格取得に向かってチャレンジしようとする意欲を持たせる。
- (2) スマートフォンの利用やSNS等のネット上の問題に関しては、身近な事例を提示し、生活習慣の改善や自己管理について継続して啓発活動を行うとともに、生徒自らが考え、注意し合うことで生徒主体の活動を増やし、規範意識を高め、自己指導能力を身に付けるよう支援する。生徒が主体的に自身の健康管理に努めるよう、生活習慣に関わる広報活動を継続して行う。
- (3) 多様な進路希望や大学等入試方法の多様化に対応するため、進路意識を醸成し進路目標の設定に活かすことができる行事を1年次から段階的に実施するとともに、情報提供に努め、よりよい情報・学習環境の提供など進路目標の達成に活かせるような取り組みを継続していく。
- (4) 学校行事の実施方法について改めて検討を行い、生徒がより主体的に関わり責任感や連帯感を高めることができるよう活動を行っていく。また、ボランティアや地域の活動に対しても主体的に参加できるよう工夫する。部活動においては、現状を明確に分析し、体力・技術・精神面の充実を図る方法を検討し、充実感を得られるよう取り組んでいく。

8 学校アクションプラン

令和7年度 石動高等学校アクションプラン - 1 -		
重点項目	学習活動（生徒の学習意欲の喚起と基礎学力の伸長及びICT活用）	
重点課題	<p>①②生徒の探究心を喚起する「主体的・対話的で深い学び」を実践し、さらには家庭における学習や探究を促進するために、ICT機器や教育用クラウドサービス等を積極的に利用し、生徒の学びに向かう意欲を高める。</p> <p>③検定合格に向けて主体的に学習に取り組む能力を育成する。</p>	
現 状	<p>①②生徒一人につき1台が配備されたタブレットと教育用クラウドサービスの活用により、すべての生徒がこれらを使いながら授業に向かう環境が整っていたが、令和7年度入学生からは各家庭にて個人所有の端末を用意することとなった。教員にはこれまで以上にこれらの利用を通じて、授業において、生徒対生徒、教師対生徒の「主体的・対話的で深い学び」を重視した改善を図り、家庭においても積極的にICT教材による学習や探究活動に取り組ませることが必要である。</p> <p>③商業科の生徒はそれぞれの目標を持って、主体的・意欲的に検定取得に取り組んでいる。検定に合格するためには、高校に入ってから学ぶ商業科目の基礎をしっかりと身に付けた上で、それぞれの検定に合わせて自らの力を向上させていく必要がある。授業においても、生徒の学力を伸ばし、検定取得につながるように、常に効果的な指導を模索し工夫していくことが求められる。検定取得が生徒の学ぶ意欲や進路目標の達成にも繋がっている。</p>	
達成目標	<p>①「主体的・対話的で深い学び」の実現のため、授業において、タブレットや教育用クラウドサービスを活用した教員の割合</p> <p>②家庭学習でタブレット及び教育用クラウドサービスを週3回程度以上利用した生徒の割合</p>	<p>③商業科：卒業までに全商主催検定9種目中、3種目以上で1級を取得した生徒数</p> <p>(1)簿記 (2)ビジ初文書 (3)ビジ初情報 (4)プログラミング (5)商業経済 (6)珠算 (7)電卓 (8)英語 (9)財務諸表分析・財務会計・管理会計のうち1検定以上</p>
	<p>① 80% ② 60%</p>	<p>10人以上（卒業年度）</p>
方 策	<ul style="list-style-type: none"> ・互見授業を行い、「主体的・対話的で深い学び」の実現について、タブレット等を用いた授業の積極的な実施と意見交換を促す。 ・生徒に効率よく家庭学習を行うアイテムとしてタブレットや教育用クラウドサービスの積極的な利用を促す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・朝や放課後の補習授業を実施する。 ・商業関連部活動を充実させる。 ・3年生1級未取得者に対する特別受験指導を実施する。 ・教員の指導力向上のための校内研修会を充実させるとともに、校外で開催されるセミナー等へ積極的に参加するよう努める。
達成度	<p>① 84% (31名/37名)</p> <p>② 1学期 56% 2学期 62%</p>	<p>③全商主催検定1級3種目以上合格者 4名(昨年同時期9名) 7種目1名、3種目3名</p>
具体的な取組状況	<p>① 今年度1年生よりタブレットは個人負担になっており、授業や家庭学習でのその積極的な利用を4月より促してきたこともあり、2年生や3年生よりも使用頻度が高い傾向がある。2・3年も学期が進むにつれ使用頻度は改善している。</p> <p>② 授業でのタブレットやプロジェクター利用については、1年の地歴、2年の情報・3年の英語でよく利用されているようだが、1年から3年で国語と数学では少なかったとする回答が多かったことから、教科の特性もあるのではと考えられる。</p>	<p>商業科の教員が連絡を密にし、個々の生徒の弱点が克服できるように検定取得に向けて、各授業で模擬問題や過去問題に取り組むことに加えて、放課後等の補習や質問教室を実施した。</p>
評 価	<p>① A ② B</p>	<p>③ D</p>
学校関係者の意見	<p>タブレットの利用頻度を高めるために、課題の提出の仕方にも工夫をするとよい。</p>	<p>ITリテラシーは社会人になってからも必要な能力であるので、この分野の教育を推進していただきたい。</p>
次年度へ向けての課題	<p>来年度は、さらにタブレット自費購入の学年が増えていくので、ICTの有効的な利用の工夫を一層進め、家庭においても、生徒がより積極的・主体的に学習に取り組む環境づくりに努めたい。</p>	<p>現2年生は現在3種目合格0名(昨年2名)・2種目合格0名(昨年1名)・1種目合格者23名であり、合格に向けて計画を立て取り組ませたい。</p>

(評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：現状維持 D：現状より悪くなった)

重点項目	学校生活（心身ともに健全な人格の育成）
重点課題	規範意識の向上と規律正しい学校生活の確立
現 状	<ul style="list-style-type: none"> ほとんどの生徒が自分のスマホを持っており、自他の個人情報を安易にSNSに掲載したり、ネットルール・マナーを守らないことでトラブルが起きている。 ネットパトロールからの情報提供を受けて指導した生徒は近年は少なく、令和3年度1名、令和4年度、5年度は0名、6年度は1名であった。 令和5年度からはネットルール4箇条を共通ルール3とマイルール1とした。マイルールについてはネットルールツリーを作成し、可視化することで意識の高揚を図った。結果令和6年度ではネットルール4箇条を守っている生徒は全体の93%であった。 スマートフォンの自己管理については、各自の貴重品ロッカーで管理することになっているが、5年度は43名、6年度は46名と一定の生徒によるルール違反、不正使用を確認している。 生活リズムの乱れ等不規則な生活習慣により、不調を訴える生徒が比較的多い。今後も基本的な生活習慣の確立ができるよう、心身の健康について主体的に考え、判断し、行動する態度の育成が必要であると考える。
達成目標	<p>①課業中におけるスマートフォン、携帯電話の不正使用件数35名以下</p> <p>②生活習慣・心と体の健康にかかわる広報活動を行う（隔月に1回以上）</p>
方 策	<ul style="list-style-type: none"> スマホ使用に関するアンケートで使用実態を把握し、ネットルール4箇条の遵守を積極的に推進することで、長時間の使用を控え、ネット依存にならないようにする。 自治委員会で生徒が主体的にルールを守るような啓発活動を考え、実行させる。 情報モラルやセキュリティの意識向上を図るため、スマホ安全教室（1学年対象）を実施する。 全体集会や授業、HR、インフォメーションコーナーを活用し、実際に起きている事件や事故の情報を伝え、被害者にも加害者にもならないために必要なことを考えさせる。 保護者にも協力を依頼し、家庭でスマホの使用について話し合う機会を持ってもらう。 生徒保健委員会で、生活習慣について今の自分たちに必要なことを話し合い、調査・研究を行う。 広報活動として、保健だよりに生徒参加型のコーナーを設ける。 保健室周辺のホワイトボードを生徒参加型の広報活動に活用する。
達 成 度	<p>① スマートフォン、携帯電話の不正使用件数27名（1学期15名、2学期12名、3学期0名）</p> <p>② 保健だより等の情報紙の発行・発信回数 10回（1学期4回、2学期4回、3学期2回）</p>
具体的な取組状況	<p>①・自治委員会でネットルール四箇条啓発ポスターを作製したが、教室掲示だけでは効果が薄く、校内放送や集会等を活用して有効な啓発活動を実践していきたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> 「マナーアップ大作戦」と称しスマホ利用や、学校での管理についてのアンケート調査を行った。その結果、携帯・スマホを個人ロッカーで管理している割合は53%であった。今回が初めての調査であったが低いように感じる。不正使用者は減っているが、見つからない割合も高いと感じる。今後は盗難や盗撮の未然防止を目的とし、個人ロッカーの利用率を向上させていきたい。 不正使用者には生徒指導主事が直接注意することになっているが、今年度は同じ生徒が2回目の不正使用を行うことはなかった。 <p>②・今年度は生徒が主体となって制作した保健だよりやホワイトボード等の掲示物を通して、感染症や熱中症予防、ストレス解消法等のメンタルに関すること、食事の大切さなど、季節に合わせて心身の健康に関する情報を発信し、生徒の自己啓発を促した。</p> <ul style="list-style-type: none"> 生徒保健委員会では、「朝食の大切さ」について生徒へのアンケートをもとに調査・研究を行い、学校保健委員会での発表を通じて、学校医から様々な助言を得ることができた。
評 価	<p>① A</p> <p>② A</p>
学校関係者の意見	心身が不調である生徒に対する支援体制をさらに整えるとともに、生徒が教育用クラウドサービス上で、SOSを常時発信できるシステムは、メンタルヘルスの向上という面においても、継続して運用していただきたい。
次年度へ向けての課題	<p>①今年度ネットパトロール件数は0件であり、不正使用者数も減少し、スマートフォンの利用については大きな問題は出てきていないが、今後も継続して啓発活動を行っていく。全国的にいじめ動画のSNS拡散が広がっており、本校としても未然防止対策の一環として、グーグルクラスルームを活用したSOSを常時発信できるフォームを設置する。</p> <p>②生活習慣に関わる広報活動について継続して行い、心身の健康について啓発し、生徒がより一層主体的に毎日の生活習慣を整え、自分で健康管理を行おうとする意識づけを図る。</p>

（評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：現状維持 D：現状より悪くなった）

重点項目	進路支援（自己実現に向けて生徒自らが努力するための支援の充実）		
重点課題	進路意識の向上と生徒への進路支援の充実		
現 状	<ul style="list-style-type: none"> ・なかなか進路について具体的な目標や志望を持たず、3年生の進路決定時に、焦りながら自分の進路を考え出す生徒が多い。そのため、学習に対して忍耐強く取り組むことができず、学習時間の不足に繋がっている。 ・年々進路が多様化しており、ますます生徒各自が自分の目標を持って、低学年時より地道に進路実現の道筋を意識することが必要になっている。また、進路の多様化に加え、入試制度の多様化が急速に広まっており、これまでの指導を生徒が必要としている指導にいかによりアップデートしていけるかが重要になっている。 		
達成目標	①1年：学びたい分野を決定している生徒の割合	80%以上	
	②2年：志望校を決定している生徒の割合	70%以上	
	②3年：自分の進路選択に満足していると回答する生徒の割合	90%以上	
方 策	<ul style="list-style-type: none"> ・大学等出張講義・研修旅行・探究活動・進路講演会などを利用し、生徒の進路意識を高め、自分の進路について考える機会を与える。 ・オープンキャンパスや説明会への積極的な参加を呼びかけ、各自の目標を明確化できるようサポートする。 ・生徒と十分に個別面談を行い進路希望を把握し、進路実現するための手立てを教職員で共有しながら丁寧に指導を進める。 		
達成度	①1年：学びたい分野を決定している生徒の割合	76.9%	
	②2年：志望校を決定している生徒の割合	65.4%	
	③3年：進路選択の満足度 満足している、どちらかという満足していると回答した生徒の割合	92.0%	
具体的な 取組状況	<p>①②入学当初から、総合的な探究の時間の自己理解・学問理解や大学・短期大学・専門学校等の出張講義などを通して、少しずつ卒業後の進路について目を向ける機会を設けている。それらの情報を踏まえ、1年次では2学期に文理選択が行われ、学びたいことを自分に問いかけ、面談の中で言葉にしていけることが分野の絞り込みに繋がっている。なかなか現実的に考えられない生徒には、担任から様々な情報を伝えたり、先輩たちの進路や取り組みを紹介したりしている。2年次には、研修旅行や学校見学はもちろん、各自の進路希望に応じて、オープンキャンパスや職場見学会等への参加を呼びかけ、各学校の特徴や違いを具体的に理解するよう働きかけを行った。オープンキャンパスに参加しレポート提出を夏季休業中の課題としているが、積極的に自分からオープンキャンパスや見学会に参加する生徒も多い。</p> <p>③自分の進路選択について満足していると回答した生徒が全体の92%となり、多くの生徒が充実感を持って高校生活を終え、次の進路に進んでくれる結果となった。年内入試を受験する生徒が増える傾向があり、学力向上への取り組みの他に、早い時期に生徒一人ひとりへの受験対応が必須のものとなっている。学校推薦型選抜のための面接練習や小論文指導など、担任や学年だけでは対応しきれない部分は、全職員で役割を分担し、指導にあたった。そのような指導の体制によって、「進路選択に満足している」と回答した生徒のうち7割近い生徒が、満足している理由として「希望している進路に進むことができた（できそうだ）」を挙げていた。また、入試制度や入試日程がより複雑になっており、情報を獲得するとともに、生徒の希望や保護者の方の思いを細かく受け止め進路選択に反映していくことが必要で、担任を中心に数多くの面談を実施し、方向性を決定した。時間はかかるが、細かな指導の積み重ねを疎かにしないことを大切にして取り組んだ。</p>		
評 価	① B	② B	③ A
学校関係者の意見	進路について考えるきっかけや刺激がなければ、生徒が進路の方向性を見いだすことは難しいと思われる。卒業生から具体的な話やアドバイスを聞くことが、進路を考えるきっかけとなる材料となるので、そのような取り組みを充実させてほしい。		
次年度へ 向けての 課 題	今回のアンケートにより、各学年全体の進路意識の傾向が明らかとなった。現1年生の分野の決定の割合は65%であるが、現2年生では77%の生徒が志望校を決めていると答えており、1年の間に非常に大きな変化を遂げている。低学年からの地道な進路支援がいかに重要であるかを示していると感じられた。今回目標としていた数字には届かなかったが、進路選択について心配なこととして、「学力・成績」以外では、1・2年生ともに、「やりたいことがわからない」「何が自分に合っているのかわからない」と答えている生徒が多く、難しい課題ではあるが、幅広い情報を提供し、まずは、自分の強みやアピールポイントを見つけられるよう手助けしていきたい。		

（評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：現状維持 D：現状より悪くなった）

重点項目	特別活動（生徒が主体的に取り組む、より充実した体験活動となるような特別活動の運営）	
重点課題	協力してよりよいものを築こうとする自主的・実践的な態度の育成	
現 状	<ul style="list-style-type: none"> 部活動や体育大会・学校祭などの学校行事での活動は、集団行動を通じて自主的な規律ある習慣・態度を身に付け、生徒自らがなすべきことを考えて積極的に活動に参画する態度を養う機会となる大切な活動である。内容を精選し、常に活動の仕方を工夫しながら運営していく必要がある。 体育大会や学校祭などの学校行事では、多くの生徒が楽しみながら取り組んでいる様子が見られる。受け身の取り組みにならないように、生徒の声を反映させて、より目的意識を持った充実した体験活動になるように工夫したい。 部活動には全校生徒のうち、運動部に52.0%、文化部に33.8%の生徒が加入している。各部の特性や部員の様子はそれぞれ違うので、よりよい活動になるように各部ごとの運営方法を考える必要がある。 	
達成目標	① 学校行事(体育大会・学校祭)への取り組みに対する充実度	5段階評価による4以上が70%以上
	② 部活動での活動に対する充実度	5段階評価による4以上が70%以上
方 策	<ul style="list-style-type: none"> 学校行事では生徒会が主体となって、生徒の声を集約し、それらを反映させて活動を計画し、生徒主体での運営を図る。 限られた学校生活の時間の中で豊かな体験活動ができるように、行事の見直しや精選を行い、また生徒の創意工夫を生かせるように配慮する。 部活動では全体計画や活動内容等について顧問と部員が情報を共有し、意見交換しながら、個人や集団の実態に応じて具体的な目標を設定し、活動を行う。 学校行事や高体連・高文連主催の各種大会等後に取り組みに関するアンケートを実施し、その振り返り結果を踏まえて以降の活動内容を検討し改善を図る。 	
達 成 度	① 学校行事(体育大会・学校祭)への取り組みに対する充実度（達成率）	
	<ul style="list-style-type: none"> 体育大会 行事の満足度 74.7% 目標を持って取り組んだ 93.5%（このうち、目標に向けて頑張った 91.8%） 文化部発表会 行事の満足度 86.0% 目標を持って取り組んだ 75.6%（このうち、目標に向けて頑張った 100%） 	
具体的な 取組状況	② 部活動での活動に対する充実度（達成率）	
	<ul style="list-style-type: none"> 部活動の満足度 61.7% 目標を持って取り組んだ 76.3%（このうち、目標に向けて頑張った 90.8%） <ul style="list-style-type: none"> 体育大会では、生徒会を中心として、生徒の声を反映させながらテーマや競技種目を設定し、また部活動単位での係活動を行い、生徒主体で企画・運営にあたった。競技や応援合戦、今年度より復活させたクラスの大縄跳びなどを通して、クラスごと、団ごとの連帯感も高まった。 文化部発表会では、ステージ発表、展示発表とも、より充実したものになるように、できるだけ多くの文化部や委員会等に参加してもらえるように声かけを行った。生徒会主催の企画では、たくさんの生徒が集まり、温かく応援する声が飛び学年の枠を超えた一体感があつた。本校の伝統である合唱コンクールもクラスの団結力を高めるよい取り組みである。 部活動では、問題が生じたときには担任や学年とも情報共有して解決を図った。 部活動アンケートでは、成果についての問いで実力を発揮できなかった等の不満感を感じた生徒が、41.8%おり、満足度が下がった要因だと思われる。しかし、全体の69.3%の生徒が自ら目標を設定し努力していたことから、充実度はほぼ達成したと捉えたい。 	
評 価	① A	② B
学校関係者の意見	部活動について、単独チームが組めない場合も、合同チームの制度等を利用して、生徒に経験の機会を確保していただきたい。体育大会や文化部発表会をとおして、生徒は連帯感や一体感を高めるよい経験となっており、今後もそのような取り組みを継続してほしい。	
次年度へ 向けての 課 題	今年度は体育大会・学校祭以外の行事でも、内容を検討し変更したものがある。引き続き内容を精選し、常に活動の仕方を工夫しながら運営していく必要がある。部活動は各部で活動内容や事情は異なるが、生徒が充実感を得られる活動を工夫していくことが大切である。	

（評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：現状維持 D：現状より悪くなった）